

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.7

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

1年ぶりの掲載になります。前回・前々回と筆者の子ども達の学校生活について紹介しました。その中で、こちらでの英語教授法についても触れましたが、今回は、英語習得に関連して私が感じていることを述べたいと思います。

日本人としてのアイデンティティ

少し前に、ヨーク大学の大学院に留学している知人の日本人から、修士論文のためのインタビュー調査への協力を依頼されインタビューを受けました。修士論文のテーマが、日本人のナショナル・アイデンティティ (National identity) についてで、日本への帰属意識と日本語との関係性の考察が論文の目的だったのですが、インタビューの質問の中に、次のような質問がありました—「私は日本人なので日本語を話す」「私は日本語を話すので日本人である」。読者の皆さんが感じる、日本人としてのアイデンティティと日本語の関係性に近いのはどちらでしょうか。この二つの捉え方は、一見似ているようですが、“日本人”をどのように定義するかを考える上で大きな違いがあるように思います。私は、インタビューで後者を選択しましたが、その理由として、前者の場合、捉え方によっては、歴史的に様々なルーツを持つことが明らかにされている日本人の定義を狭く規定し、例えば、在日韓国人やアイヌの方々をその定義から

意図的に外すということにもつながり得るのに対し、後者の捉え方をすると、多様な人々を日本人の定義に含められることが挙げられます。私自身のこと限定すれば、日本国籍を有し、日本人の両親の元に育ち、日本語を母国語とし、日本語で教育を受けてきましたから、前者の捉え方でも違和感はありません。しかしながら、どのような人々を日本人と捉えるのかという問いについて考えると、前者の捉え方にはかなり違和感があります。単に法律的な話であれば、「日本人＝日本国籍保持者」ということになるのですが、日本人としてのアイデンティティと日本語との関係性ということになると、話はそんなに単純ではありません。

読者の皆さんは、普段生活をされる中で、自身が日本人であるというアイデンティティを意識することはあるでしょうか。私は、留学するまで具体的に意識したことはなく、自身が日本人であることは空気のようなもので、そこに疑問を挟むこともありませんでしたが、アメリカ、そしてイギリスでの留學生活を通して、日本人としてのアイデンティティを強く意識するようになりました。以前の回でも触れましたが、ヨーク大学の留学生に占める日本人学生の割合は、同じアジアの留学生の中でも、中国や韓国を始め、東南アジア諸国と比べると非常に少なく、大学内や街で声を掛けられると、決まって中国人だと認識されます。私は、

今はそういった場面でも特に何も感じることはなく、例えば、“Hi!”といった日常の挨拶と変わらないぐらいの当たり前のものとして受け止めています。そうした経験が、自身が日本人であること、さらに、同じアジアだけでなく、アラブ、ヨーロッパやアメリカ等の国々に対して、自身がどのような前提 (assumption) を持っているかへの気付きの機会を与えてくれたように思います。私にとって、日本人であるというアイデンティティは、日本と他の国々との関係性を意識した時に、初めて自身の中で感じるものであり、それを抜きにして語ることはできません。そして、その関係性も政治、経済、及び文化のダイナミズムの中で変化し続けます。この20年間の、日本の経済力の落ち込みと、それに伴う国際社会における日本のプレゼンスの低下、そして、中国の台頭によるアジアにおける盟主の交代という日本が置かれた現状をどう理解するかが、それぞれの日本人としてのアイデンティティを形成する上で大きく影響を及ぼすように思います。そうした現状を良しとしない人にとっては、上記の例のように、外国の街中で中国人や韓国人に間違われたとしたら、自身の日本人としてのアイデンティティが傷つけられたと感じるかもしれません。また、日本に対する批判的な議論に対して、自身への批判と同一化して反発を感じ、さらに、私のこの文章に対しても不快に思うかもしれません。私は、そうした“naive”な態度に対しては距離を置きたいと強く思います。

アイデンティティと日本語、そして英語

冒頭のインタビュー調査の質問に戻りますが、日本人としてのアイデンティティが形成される上で、日本語が果たす役割は非常に大きいと思います。両者の関係性を考える上で、国際結婚している両親をもつ子ども達のケースが興味深い示唆を与えてくれます。ヨークには、数は少ないながらも、イギリス人と国際結婚している日本人の方々おり (※ほとんどが女性ですが)、彼等を中心とし

た日本人のネットワークが組織されていて、子ども達、そして親同士の交流を目的とした集まりが定期的にあります。その集まりには、私の家族のような留学組も参加します。国際結婚組は、普段の生活環境が英語中心になるため、それぞれの家庭で子ども達の言語教育についての方針を持っています。例えば、母親と話す時や兄弟間で話す時は日本語で、イギリス人の父親と話す時は英語で話すようにするというルールを設けている家庭が多いです。しかしながら、子どもが、日本の幼稚園や保育園にあたるpreschoolやnurseryに通うようになると、家庭の中でも英語が占める割合が高くなってきて、上記のようなルールは続かなくなるケースがほとんどです。また、イギリス人の父親が日本語でコミュニケーションができるというケースは、私の知る限りでは全くないので、母親の方が、父親が理解出来ない日本語で子どもとコミュニケーションをすることをためらう気持ちも、子どもの成長に伴い大きくなってきます。国際結婚組の方で、子どもの日本語能力の向上のために、ヨークから車で30分程の距離にあるリーズ (Leeds) にある補習校に子どもを通わせている人もいますが、授業は土曜日の午前中のみのため、日本語の向上のためには普段の家庭学習が不可欠です。補習校では日本の教科書が使われるのですが、学年が上がるにつれて、習得しなければならぬ漢字が増えてきて、親の思いとは裏腹に、そこでつまづくケースがかなり多いようです。

これは、国際結婚組に限った話ではなく、両親が日本人であっても同様です。私の友人で、ヨークで長年就労し、子ども達もこちらで生まれている家族がいるのですが、その子ども達にとっては英語が第一言語で、日本語は第二言語になっています。彼等と日本語でコミュニケーションをすることは可能ですが、例えば、独り言を漏らす時や兄弟げんかをする時などは英語です。学年では上級

ですが、低学年で習得する漢字も身に付いていないため、国語の教科書を読むことも難しいですし、他の教科でも、例えば、算数の問題の意味を理解するのが難しいようです。両親は何とか日本語を身につけて欲しいという思いから、日本語の本を読ませたり、ドリルなどをやらせようとしても、泣いて嫌がるそうです。彼等が日本に一時帰国した際に、空港で「みんな日本語が上手だね。」と言ったという話も聞きました。傍目からは、彼等は英語と日本語のバイリンガルのように思われるかもしれませんが、彼等にとっては第一言語はあくまで英語であって、日本語は、聞けば理解できて話せるけれども、読み書きについてはかなりの困難を伴う第二言語という位置づけでしょう。グローバル化が急速に進む中、日本でも、リンガ・フランカ (lingua franca) である英語の重要性がますます高まっており、英語の早期教育の必要性が叫ばれていますが、本当の意味でのバイリンガルになるというのは決して簡単ではありません。

言語学の専門的な定義ではありませんが、ここでバイリンガルを、英語と日本語の双方で読み・書き・話すを抽象的思考を伴うレベルでできるケースとすると、私の知る国際結婚組の方の子どもで、そのレベルに達していると思われるケースは一人だけです。そのケースの子どもは、現在中学生で、イギリス人の父親と日本人の母親の元で育ち、先述のリーズにある日本人補習校にも通い、また、毎年イースター休暇を利用して1ヶ月程日本に一時帰国した際には、公立小学校にも通っていました。その子が、他の国際結婚組の方の子ども達と違い、バイリンガルのレベルに達している (と思われる) 要因として、本人の日本への興味・関心が非常に高いことと、また、将来、日本の大学への進学や就職も現実的な選択肢として考えていることが大きく影響を与えているように思います。その子にとっての日本語は、あくまで興味のある日本のテレビを見たり、好きなアイドルなどをチェックするための手段であって、勉強する目的ではないのだと思います。対して、他の子ども達にとっては、

日本語は勉強するものであって、日本語を使って何かをするという位置づけではないように思います。そうした違いは、本人の特性や興味関心に依るところが大きく、親がいくらお尻を叩いても、本人に動機付けがない限り、日本語、さらには日本への興味を維持することは非常に難しいです。彼等に自分自身を何人だと思えるのかについて聞いたことはありませんが、日本語能力が、彼等のナショナル・アイデンティティの形成にかなりの影響を与えているかもしれません。

私の子ども達については、ヨークに約4年間暮らし、上の2人は現地の小学校に通っているため、英語の能力も向上し、学校生活でそれほど不自由なくコミュニケーションができるぐらいのレベルですが、家庭では基本的に日本語です。しかし、兄妹で話をする時など、日常のちょっとした場面で日本語よりも英語が頻繁に登場します。私の場合は、4年間という限定でイギリスに留学し、その後は日本に帰国することが決まっていたため、帰国後に、子ども達が日本の学校や習慣、考え方になるべく戸惑わずにアジャストできるように、事あるごとにイギリスと日本の違いについて、どちらが良い悪いという話ではなく、それぞれの常識が違うことを説明するようになってきました。また、日本語の習得に関しては、日本語の絵本の読み聞かせをしたり、日本から取り寄せた公文のドリルを毎日させるなどしていますが、日本の小学校に通う同級生の子ども達と比べたら、普段接している日本語の量が圧倒的に少ないでしょうから、帰国後に通う小学校に慣れるまではしばらく時間がかかるだろうと思います。子ども達も、そのうち日本に帰国し、日本の小学校に通わなければならないということを理解しているので、渋々ながらもドリルに取り組んでいます。もし日本に帰国することなく、私がこちらで就職して生活することになっていたら、子ども達が日本語を学ぶ動機付けを維持することは難しいでしょうし、先述の両親とも日本人のケースの子ども達

のように、遅かれ早かれ、英語が彼等にとっての第一言語になるであろうことは容易に想像がつきます。ふたりとも日本で生まれていますが、日本での記憶があるのは9歳の長男だけで、6歳の長女にはほとんどありません。ヨークでの生活を通して、様々なバックグラウンドを持つ友人達にも恵まれ、こちらの習慣、そして考え方に馴染む中で、彼等の中でイギリスへの愛着が確実に育っています。少し前にカナダで行われた女子サッカーのW杯の準決勝で日本とイングランドが対戦し、日本が勝利しましたが、長男は母国である日本とイングランドそれぞれに愛着があるようで、日本の勝利にうれしい気持ちがある一方で、イングランドの敗退に残念な気持ちもあるようでした。このままイギリスに住み続ければ、彼等にとって日本はあくまで両親の出身国であって、ナショナル・アイデンティティはイギリスに対して持つようになるかもしれません。親としては、彼等には日本人としてのアイデンティティを持って欲しいという気持ちはありますが、強制できることではないので、帰国後は、こちらでの経験を通して得た視点を大切にしながら、言わばアウトサイダーとして、単に日本の習慣や考え方を無批判に受け入れるのではなく、それぞれの視点を持ちながら自分達なりのアイデンティティを育てて欲しいと考えています。言葉に関しては、英語を使う機会もほとんどなくなるでしょうから、早晩忘れていくと思いますが、英語力の維持のために特別に学習する機会を持たせる考えはありません。英語に限らず、母国語以外の外国語は、本人に動機付けがない限り身に付くことはないであろうことは、明らかのように思います。私の子ども達が、帰国後に、こちらの友人達と交流を続けたいという気持ちがあればメールやスカイプを利用できますし、また、日本でも機会があれば英語でコミュニケーションをすることもありますが、そうでなければ、将来、本人達が英語が必要だと思った時に、本気で取り組んでくれればと考

えています。私が子ども達に対して強く思うのは、英語よりも、自分とは異質な習慣や考え方に接した時に、自分の考えが正しくて、相手は間違っている、または、自分の（国の）方が勝っていて、相手（の国）は劣っているというnaiveな態度ではなく、その違いを尊重し、楽しむことができるような態度を持って欲しいということです。よく言われるように、英語はあくまでコミュニケーションのためのツールですから、そうした態度が涵養されることなく英語を学ぶことにどれほどの意味があるのか大いに疑問を感じます。繰り返しになりますが、英語を使って”何を”したいかが重要なのであって、その動機付けが曖昧なままで英語を習得するのは、非常に難しいと思います。

以上、知人のインタビューをきっかけにして改めて考えさせられた日本人としてのアイデンティティと日本語、さらに英語との関係性について述べました。本稿が、読者の皆さんにとってのそれぞれの関係性を考えるきっかけになれば幸いです。最後に、インタビューのことを掲載することを快く了解して頂いたIさんに心より感謝致します。